吉備の古代史シリーズ　第 11 回

播磨の戦はあった!!―片山神社伝承が証明

「稚武彦は再度播磨へ」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長　石合　六郎

＜はじめに＞

岡山県赤磐市由津里の片山神社に不思議な伝承が伝わっている。古事記には孝霊天皇の時、「大吉備津彦の命と若建吉備津日子の命との二柱相副ひて、針間の氷河の前に忌瓮を居ゑて、針間を道の口として、吉備の国を言向け和しき」（倉野憲司校註岩波文庫版）とある。これは吉備津彦兄弟が、吉備を平定した時の逸話とされている。ところが、同神社の伝承では「孝霊天皇の御宇七十二年に、吉備若日子建王子が播磨を征せられた時に、籠もって祈り給うた。」（岡山県神社誌Ｐ１４９）とある。なんと、吉備から播磨の国を平定することを祈ったというのである。

＜1＞片山神社の伝承

ひっそりとたたずむ片山神社と吉田宮司さん

片山神社のある赤磐市は備前国にある。岡山市の北東部と接し、田園地帯がひろがる。備前・美作には吉備津彦命の伝承地は少ないといわれる。人によって数え方が異なるが、筆者が確認しているのは片山神社（赤磐市）をはじめ、吉備津岡辛木神社（岡山市中区）、片山日子神社（瀬戸内市）、風神社、化氣神社（ともに吉備中央町の備前分）、天石門別神（美作市）の６神社である。

片山神社社記には次のように書かれている。

片山神社社記（由津里区有文書）

（社記は絹地に虫喰ひ破れ傷みたる故謹しみて写し置くもの也）

一、孝霊天皇の御宇吉備若日子建王子の播磨を征せられし時、祈り事に籠り給ひて鎮兵の後再び（祈り事）営み給ふ同じ御七十二年也。

一、（神社を）立て替へ奉る、天平二年九月二日、祭主、鳥取恵美磨呂、工匠安藤阿波守

一、初め鳥取山の頂に迦毛大御神社在り東に野間北に長尾有る也

一、永承四年諸国神社仏舎利納めし時社を峯より麓に移し奉り片山大明神と改め祭りて正三位の神位を贈らると延喜式赤坂郡の部鴨三社の一也、大嘗会に朝廷の供物有る也

一、神宮地〇古代より田八段三畝歩有り社領の地国主宇喜多直家これを没収し則ち田壱反歩〇御切手九斗六升下附され候也。

寛政五年三月十日

神職組頭物部立合

松田嶋之介 謹書

奉記

一、大国主命　阿遅鉏高日子根神

神屋楯女神

若山昨神　迦毛大神社奉祭す

前に祈言白せし、播磨國諸賊を征し和平に鎮め如く誓い奉る

御社新に再営し奉り国土安全を謹みて祈り白す

御祖孝霊天皇の七十二年秋、吉備若日子建つ

孝徳天皇三年十二月二日絹地に書有り破損の以に改め書す

鳥取文麻呂謹書

元和九年九月十二日

横山朝臣謹書

＝「赤坂町誌」ｐ５３７のものを読み下し文にした

◎吉備平定に陸路説

先にふれたように「吉備若日子建王子が播磨を征服した際に祈事を行い、鎮兵した後、再び御礼の祈願を営まれた」と記されている。これまで古事記によると、吉備津彦命一行は大和を出た後、播磨の地に現れる。

その地（兵庫県加古川市加古川町寺家町）に忌瓮を据え吉備平定を祈ったたことはよく知られる。吉備側では、吉備津彦命は「岡山市南区妹尾の明神鼻に上陸した」という伝承がある。一行は「海路で吉備に入った」ことを示すものとされてきた。

それに対して、片山神社の文書を受け、陸路で吉備に入ったのではとの説が出てきた。筆者も当初、「赤磐市赤坂町由津里は、古代の山陽道はまだ整備されていないが、珂磨（磐梨郡）、高月（赤坂郡）の駅家に近く、可能性はある。祈事を行った鳥取山も決して高くはないが“国見”の山であったのかもしれない」と海路と陸路の２ルート併用もあるかと漠然と考えていた。

想定される加古川から片山神社を結ぶ最短ルート

私より先に吉備津彦について調査された岡本正人氏著書「吉備津彦命の正体」の表紙

◎誤解招く解釈

筆者より十数年前に自らの先祖のルーツのことを探ろうと、何度も岡山、広島、兵庫等を歩かれた愛媛県松山の医師・岡本正人の労作「吉備津彦命の正体」（１９９６年、近代文芸社刊）がある。私が調査を始めたころには登場の方も何人か鬼籍に入られ取材できず、その証言を参考にさせていただいた貴重な書である。

その岡本氏は、平成３年５月５日、片山神社を、その翌日には、加古川市の日岡神社を訪ねている。日岡幾朗氏（当時宮司）から事前に聞いていた「大吉備津彦命は祈藤師であり、実際に将軍として吉備を平定したのは、武勇にすぐれた弟・若建吉備津彦命である」という話とともに「大吉備津彦命が、播磨の氷河の河原で忌釜を据えて祖神にお祈りしたら、『吉備の国は平定できるであろう』という御告げがあったわけです」（同書ｐ９０）と聞かされたという。

同氏はこれらの話と片山神社文書から〝陸路説〟を展開する。

◎曲解だった侵攻先

「片山神社文書は『古事記』の"吉備平定"記述の証明とも言うべき重要な内容が 四点書かれている。ただし、文面通りに読むのではなく、『文面に隠されている真実を読み取る』という作業がここでは必要になってくる。」（同書）と。その解釈によると、「この真相は、"吉備を愛する気持ち"から、『自分達の国・吉備が負けた』とは、どうしても書き残したくない。逆に、『播磨を征した』と書いておこう、ということで、逆の表現になって書き残されたものである」と推断する。（注＝私のこの推測が実際に正しかったことが、次に紹介する『天石門別神社』の記録から証明されるのである）。」（以上同書ｐ１０５，１０

６から)。

先の天石門別神社の記録とは、「天石門別神社の神天手力男神は敵の潜むところに黒雲となって豪雨を降らせて知らせ、吉備平定を助けた。その約束が果たされたので、大吉備津彦と稚武吉備津彦が同神社の滝に感謝の祈りをささげた」というもので、これが片山神社文書の「再び（祈り事）営み給ふ」であると岡本氏はとらえたようだ。

◎正しかった片山神社伝承

インターネットで「吉備平定　片山神社」を検索すると、複数のサイトが表示される。「陸路説」や「海路・陸路併用説」が記されたサイトへたどり着くことだろう。こうした議論はある程度話題にはなったようだ。

しかし、前章の「片山神社文書」の解釈は岡本氏の曲解だった。古代の播磨國は多くの国からの移住者を受け入れている。風土記研究者で皇学館大学の荊木美行教授は「『播磨風土記』の史的研究」の中で「第二章 播磨風土記と出雲」「第三章 播磨風土記と讃岐」をたて、出雲からが移住６件と、近江、河内、筑紫などの例もあげている。また、讃岐からは１０件の例をとりあげている。その背景について「播磨国の土地が肥沃で、交通の要衝であったことから、入植して当 地に定着するものが多かったからだ」（同書ｐ45）としている。

＜２＞吉備から播磨へ

吉備関係者が播磨に住み着いた状況について、「高砂市史高砂町誌」（１９８０年刊）にまとめられていたので、その他の情報と合わせて下記のような表にしてみた。

吉備と播磨の交流記録一覧

登場人物	文　　献	時　代	内　　容
①　吉備比古・比賣	播磨國風土記	成務天皇の御代	丸部臣らの始祖比古汝茅(彦汝)を派遣して国境を定めさせたとき、吉備比古と吉備比賣がこれを迎えた。この時、比古汝茅が吉備比賣を娶って印南別嬢が生まれた。(引用･高砂市誌高砂町誌)
②賀古・印南の吉備氏族（人上）	続日本紀	称徳天皇元年	称徳天皇天平神護元年五月庚戌 の条に、播磨守従四位上日下子麻呂等が次のように言上した。 部下の賀古郡の人外従七位下馬養造人上が款して云うには、人上の先祖吉備都彦の苗裔、上ッ道ノ臣息長ノ借鎌は難波(仁徳)高津ノ朝廷に仕えて播磨国賀古郡印南野に家居していた。その六世の孫牟射志は馬を養って上宮太子に仕えて馬司に任ぜられた。これによ って庚午年籍を造るの日、誤って馬養造に編せられた。伏して願わ かいのみや? くは、居地の名を取って印南野臣の姓を賜へ、というのであった。 国司が覆審して、事実であると申したのでこれを許した。(引用･高砂市誌高砂町誌)
③宗男の子らに笠朝臣の姓を賜る	三代実録	称徳天皇元年	『三代実録』に、左京の人左大史正六位上印南野臣宗雄の男三人、 女一人と妹一人に笠朝臣の姓を賜わった。その先祖は吉備武彦命から出た人である。宗雄がみずから言上した言によると、吉

			備武彦 命の第二男、御友別命の十世の孫人上が、天平神護元年に居地の名を取って、印南野臣の姓を賜わった。第三男「鴨別神がこれ臣の先祖であるというのであって、祢徳天皇に願い出た人上は、吉備武彦命の二男の御友別命の十世の孫に当ることがわかる。（引用･高砂市誌高砂町誌）
④播磨国の牛鹿臣	平安遺文	天武 13 年 （684）	播磨国の牛鹿屯倉と関係する氏族。牛鹿は宇自可・宇自賀・宇自加とも書く。『古事記』では、日子寤間命（孝霊天皇の御子）の後裔氏族とされる。この点は『新撰姓氏録』とも一致するが、これに対して『先代旧事本紀』は、日子寤間命の同母兄弟である稚武彦命を牛鹿臣の始祖とする。後述するように、牛鹿臣には笠朝臣に改姓する者が多く、笠朝臣が稚武彦命の後裔を称していたことから、このような錯綜が生じたか、あるいは意図的に改変したものと考えられる。（国学院大氏族データベース針間牛鹿臣の項）

（① ～③項目は「高砂市史高砂町誌」＝ｐ４～５。④項目は国学院大データベースから）

各項目について解説すると、【①吉備比古・比賣】は、成務天皇の御代となっているが、これはあり得ないことであり、何らかの間違いだろう。この項についてはコラムも含めて後で詳述する。

【②賀古・印南の吉備氏族（人上)】は称徳天皇天平神護元年（765 年）に①で記されている吉備都比古（「都」が入っているが同一人物）の苗裔の人上が、仁徳天皇や聖徳太子に仕え功績があった。昔、戸籍が間違われたので、印南野臣の姓を与えてほしいと申し出て、国司が調べたら正しかったので、これを許した、というもの。①の吉備比古の子孫と思われる。

【③宗男の子らに笠朝臣の姓を賜る】も上記の①②に関係する。『三代実録』（858～887 年）に、宗雄という人が男三人、 女一人と妹一人に笠朝臣の姓を賜わった。自分の先祖は吉備武彦命の三男の笠臣（鴨別命の三男）だという。また、②の祢徳天皇に願い出た人上は、吉備武彦命の二男の御友別命の十世の孫であるともいう。

【④播磨国の牛鹿臣】は③の宗男（笠臣）と関連があるかもしれないがはっきりしない。牛鹿は宇自可・宇自賀・宇自加とも書く。『古事記』＝日子寤間命（孝霊天皇の御子)、『先代旧事本紀』＝日子寤間命の同母兄弟である稚武彦命を始祖とする。牛鹿臣には笠朝臣に改姓する者が多いための稚武彦命を始祖説は錯誤とみる見解もある。詳しくはわからない。④の牛鹿臣を除いて一つの系譜に繋がるように見える。

この状況から吉備一族が古くから、播磨へ入り込んで、子孫をつないでいっているいることがわかる。

片山神社の「吉備若日子建王子が孝霊朝に播磨を平定した」とはこのことだったのだろ

う。「戦」や「平定」の表現は立場の違いでかわたのかもしれない。

◎実年代で推測

この吉備勢力の播磨への移住時期は、これまでの検討で次の３つが考えられる。

〔1〕片山神社の伝承なら

若建吉備津彦の祈りが成就し、社殿を建てたのが孝霊天皇７２年と書いてある。御歳１０６歳とあるので、在位７２年は最晩年であろう。次ページの安本年代表を参考に推定すると、在位期間推定は９年間で、３２４年ごろ～３３３年ごろとみて、最後の年から余裕（２年）をみて３３１年ごろとした。

〔2〕古事記の孝霊天皇の時なら【孝霊帝御代＝324-333】

「二柱相副ひて、針間の氷河の前に忌瓮を居(い)ゑて、針間を道の口として吉備國を言向け和したまひき」とある。崇神天皇（在位３２４～３３３年に在位）の時のこととしか分らないが、この記事が同帝の事績の最後に書かれていることから、西暦３３１年ごろと仮定できようか。

コラム　麗しき乙女と天皇の恋物語

播磨國風土記に景行天皇と印南別嬢の逸話が載っている。すでに「吉備と播磨の交流記録一覧」の①として紹介しているが、風土記本文の引用を引用してみよう。

❖　　❖

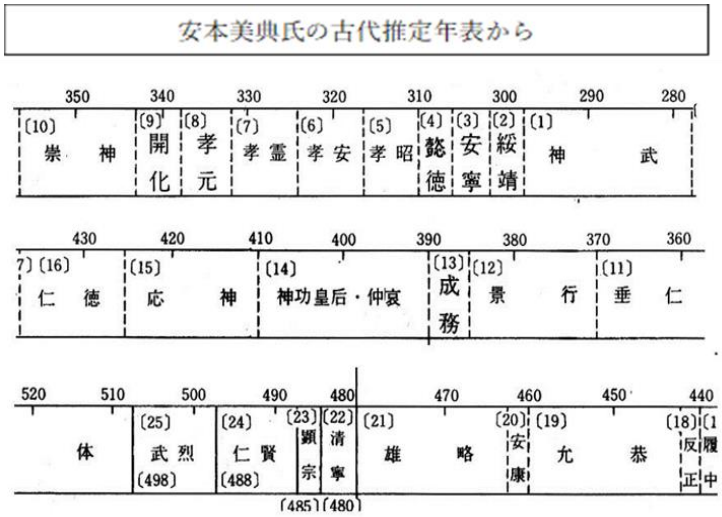
志我の高穴穂の宮に天の下知らしめしし天皇(成務)の御世、丸部臣等が始祖比古汝茅弟(彦汝)を派遣して国境を定めさせ給ひき。時に吉備比古と吉備比賣と二人是に参ゐ迎へき。比古汝茅弟、吉備比賣を娶ひて生める兒、印南の別嬢、この女端正しきこと當時秀れたりき。時に大帯日古の天皇、この女を娶さむと欲し下り幸行し給たまひき。別嬢、聞きて、やがて件の島に遁れ度りて隠び居りき。故、南比都麻といふ。(岩波文庫「風土記」、武田裕吉編、ｐ１８１)

（写真説明　上は兵庫県立海浜公園にある人工の南比都麻、下は高砂市にある御所殿神社。南比都麻の伝承地。祠前の池からは土師器が出土しているが、確証はない）

〔3〕書紀の四道将軍の時なら

【崇神帝御代＝343-358】

一度出発して、武埴安彦の反乱があり、それを鎮圧後、再出発したのが崇神天皇１０年１月２２日で、翌年の１１年４月には復命しており、当時は徒歩であることを考えて、１０年１２月中にはその国への入国を果たしているだろう。この結果を表にすると下表の通りだ。



	文　　献	吉備入り推定年	播磨入り推定に準備３年をプラスした
〔1〕	片山神社伝承	―	西暦３３１年ごろ
〔2〕	古事記	西暦３３１年ごろ	西暦３３1+3 年＝334 年ごろ
〔3〕	日本書紀	西暦３５４年ごろ	西暦３５７+3 年＝357 年ごろ

＜３＞吉備比古は誰か

播磨国風土記に出てくる「吉備比古」と「吉備比賣」は何者であろうか？

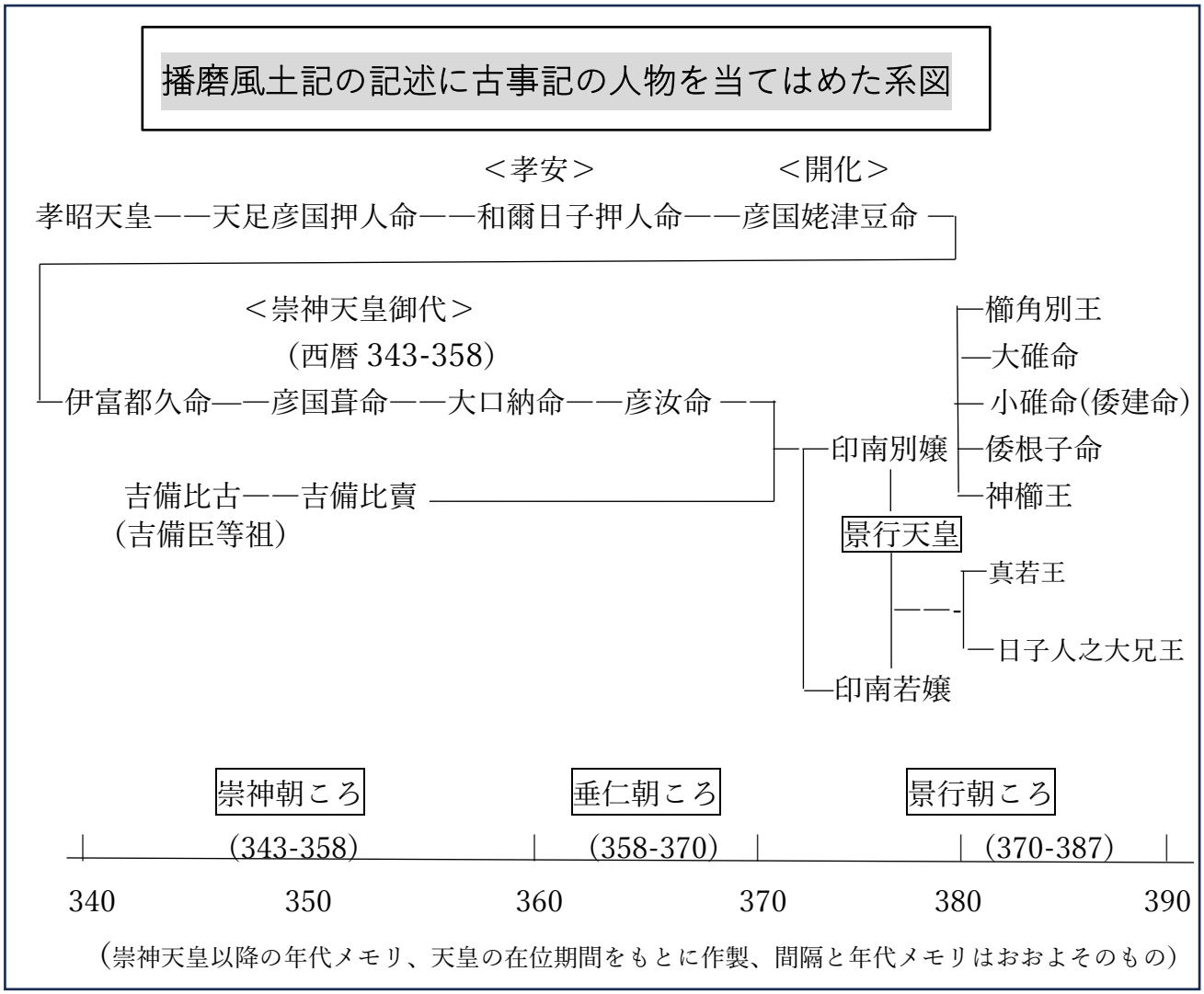
日本書紀では「播磨稲日大郎媛の出自」に触れていない。古事記は景行段で「此天皇、娶吉備臣等之祖、若建吉備津日子女、名針間之伊那毘能大郎女」と述べられ、景行妃の父は若建吉備津日子だというのである。

これに対して播磨国風土記はコラムにあるように「印南別嬢吉備の父は丸部臣等の始祖比古汝茅弟彦汝だという。こ時に吉備比古と吉備比賣が出迎え、比古汝茅と吉備比賣が結ばれ生れたのが印南の別嬢だという。

結論だけをいうと、風土記の記述がもっとも事実に近いであろう。父親の問題を除けば、大きな齟齬はない。これらの情報をもとに系図をつくった。系図に西暦年代を付けてみた。

文献別の呼称の違い一覧

播磨國風土記	印南別嬢	印南若嬢
日本書紀	播磨稲日大郎媛	播磨稲日稚郎媛
古事記	針間之伊那毘能大郎女	針間之伊那毘能若郎女



この系図で見ると、西暦３７０年に即位した景行天皇の結婚は３７０年代の初めであろう。彦汝命と吉備比賣が出逢ったのは不明なのでＸ年とする。それから子供が生まれ、結婚年齢に達するのには、さらに１年、結婚までに平均１８年として１９年はかかる。Ｘ年は３７０年—１９年＝３４１年前後となる。３４３年ごろ即位の崇神朝はまだ始まっていない。結婚適齢期間は、１４、１５歳から３０歳前後までの約１５年間はあるのでＸ年は決められなくても、平均１８年の成長期間に適齢期感の１５年を足せば３３年前後の幅があるのでどの時期の播磨入り（Ｘ年）でも婚姻は十分成り立つ。

しかし、古代の婚姻年齢を１５歳程度とすると、稚武彦の孫が結婚するには、片山神社説の西暦３３１年なら、結婚年は３４６年、古事記の３３４年なら同３４９年でいずれも景行天皇の即位年した７０年代には届かない。日本書紀の３５７年なら同３７３年で極めて整合性が取れる。筆者は四道将軍の吉備入りを孝霊天皇期とも崇神天皇期とも決めていないので判断しかねるが、孝霊天皇期なら１代程度の世代の追加が必要だろう。

＜４＞仮説を立ててみる

今回の論考を１つの仮説としてまとめてみる。

片山神社の社記は、『播磨国風土記』にある稚武彦の播磨への再訪問の吉備側の伝承だ。これがきっかけで景行天皇のお后・播磨稲日大郎媛が誕生する

① 吉備比賣と彦汝命の出会いは成務天皇の時は矛盾するので間違いである。
② 稚武彦命は陸路で播磨に入る。崇神期なら本人が吉備比古、孝霊期なら１世代程度の後の子孫かふさわしい。吉備比賣はその娘であろう
③ 比古汝茅と吉備比賣の間に生まれたが印南別嬢だ
④ 美しい印南別嬢を景行天皇が見染め皇后にたてる。その後、妹の印南若嬢も後宮に迎える
⑤ 別嬢との間に日本武尊をはじめ５人、印南若嬢との間に２人の皇子、女皇子が生まれている（８ページの系図）

＜おわりに＞

日本武尊は吉備の血脈の人と信じてきた。古事記がそう述べてきたからだが、播磨国風土記だけが、和邇部の始祖・比古汝が父親として語られる。といっても医学的には和邇部も吉備氏も同じ皇族で同じ男性遺伝子で変わりない。成人後の日本武尊の播磨とのかかわりは、確認されていない。

日本武尊は妃に「吉備穴戸武媛」を迎えている。しかし、彼女の足跡はようとして見つからない。彼女の父親とも、兄といわれる吉備武彦は備中に「宮」（総社と足守）があるとされながら、奥津城は備前にある。彼を被葬者とする備前車塚古墳（前方後方墳、全長５０数メートル）から見下ろせる平野に「字が『大宮』とする地がある。ここに日本武尊を祀る神社があった（命と媛が吉備で暮らしたのなら、ここが命と武媛の愛の巣かも）」（岡山神社「さかおり三号」平成２７年１０月を参照）という。今後本格的な発掘がなされるとはっきりするかもしれない。

今回は地方の小さな「片山神社伝承」から「稚武彦の播磨進攻」「播磨別嬢の父のこと」などの謎に光が当った。古事記、日本書紀、播磨國風土記が伝える事実を確かなものする

ことができた。

この時代は吉備氏と大和朝廷の親密さをいっそう深めようとしていた。神武東遷で支援した吉備は、日本武尊を支援、婚姻関係を結び、さらに鴨別が神功皇后に随行、応神帝や仁徳帝のお妃をだし絶頂期を迎えた。今回の稚武彦の播磨再訪はその吉備の絶頂期へのきっかけとなったといえそうだ。

あなたの近くの神社も重要な伝承をもっているかもしれない。

プロフィール

いしあい・ろくろうNPO法人福岡歴史研究会副理事長　石合　六郎　昭和20年4月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和44年卒。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成17年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同19年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。

「吉備津彦命と温羅」　　AMAZONで販売中
（ペーパバック＝１１０３円　Kindle版＝デジタル６５０円）

季刊「古代史ネット」のページ　執筆記事一覧

（吉備の古代史シリーズは季刊「古代史ネット」の第３回から掲載しています）

第１回　二人の天皇が行幸された谷（2020.06）

第２回　巨大古墳を考える（上）吉備津彦の時代（４世紀）（2020.09）

第３回　巨大古墳を考える（下）御友別の時代（５世紀）（2021.12）

第４回　温羅伝説を考える（上）―こんな物語だった（2021.03）

第５回　温羅伝説を考える（中）―成立過程とその起原「神仏習合の中から誕生」（2021.06）

第６回　温羅伝説を考える（下）―桃太郎伝説の誕生「日本人の心映す鏡」（2021.09）

第７回　素戔嗚尊の剣（上）―吉備のどこにあった？「十握の剣流転の真実」（2022.09）
第 8 回　素戔嗚尊の剣（下）―どんな形だったか？「邪馬台国時代の北部九州と類似」（2022.03）
第９回　造山古墳の被葬者を探る（上）「吉備海部の娘・黒日売命か」（2023.06）
第９回　造山古墳の被葬者を探る（中）「吉備海部は備中にいた」（2023.09）
第１０回　造山古墳の被葬者を探る（下）「謎を解く肥後系古墳と血脈」（2023.12）
第 11 回　播磨の戦はあった!!―片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」（2024.03）